

翻刻 『武烈天皇儀』

翻刻の会

一、底本には刷りが比較的良好と思われる、大阪府立中之島図書館所蔵、元題簽・元表紙の七行百丁本を用いた。
二、底本を忠実に翻刻することを原則としたが、次のような校訂方針に拠った。

- 1 本文は文字譜を手掛かりにして、適宜改行を施した。ただし、道行・景事の類、会話の途中等では改行しなかった。
- 2 各丁の表・裏の終わりは、丁数の数字とオ・ウの略号を（ ）で示した。
- 3 仮名は現行の字体に統一した。ただし、感動詞、送り仮名、捨て仮名の類以外の、本文中の「ニ」「ハ」「ミ」は「に」「は」「み」とした。

4 漢字は、一部の異体字を除いては、原則として通行の字体に統一した。

5 漢字・仮名ともに、誤字、脱字、当て字、仮名遣い、清濁は底本の通りとした。

6 特殊な略体、草体、合字等は現行の表記に改めた。

7 豊字は、平仮名は「ヽ」、片仮名は「ㇿ」、漢字は「々」に統一した。ただし、「くく」はそのまま残した。

8 文字譜の類はすべて採用し、本文の右傍の適切と思われる位置に翻字した。

三、本文の翻刻は、次に掲げる翻刻の会（学部学生の研究会）の会員によってなされた。

兩宮洋子、守屋美紀、佐藤綾子、高橋さやか、為重知子、稲川あい、中林美木、樽崎悦子、武田芳子。

文字譜、改行及び本文の最終確認は山田和人が担当した。

（山田和人）

武烈天皇儀

作者 為永太郎兵衛

序詞
周書を閲するに忠臣を焚あぶり。孕る婦の胎を剝。朝に渉るの脛を割。紂王が罪天につらぬき。億万の人民叛心をいだく。時に文孝貫越を執給へば。百姓慄々として角を崩が如しとは。今此時代秋津君。人皇廿六代。武烈天皇の統御あるへ御代の安危ぞ。脆し。

地主
主上は天賦勇悍にて驕邪放逸の御人となり。万機糸を乱せるごとく。御后鳥飼の君御心をいたましめ。諫の鼓の（一オ）例を引。上王公より下士庶人に至る迄。帝を諫の云の葉の心をすぐに絵にあらはし。思ひくくに捧べしとの仰をうけ。工夫をくだく百敷や。堂上には後の御養父。平群の大使主高鳥公。上を詔ふ一卷を箱に納めて着座あれば。補佐の良臣三輪の大臣百枝公。同じく所見の一軸に心をこめし一ツの箱。いづれも王座に献ぜらる。

地主
時に天皇御簾半捲上させ。宮中ひゞく御声高く。今度鳥飼の后が韋弦によつて臣等にいひ付。朕を諫の写絵兩人が献納。一々に見やうずるはと宣旨あれば。勤番の職事鯨の臣（一ウ）座を立て。高鳥公の献上の一軸を。文杖におし立かしこに掛れば。あやどり彩敷娘姿の浮世絵の。花のかんばせうつくしきに紫霄の人々案に相違。百枝公の掛物にはいか成ル絵をか

、れしやらんと。ひらく間遅と打見れば。初の絵図に引かへて。能忍寂黙の仏の御影。君を始め列座の群臣。和国に見なれぬ金色等身の。仏絵に興さめ。是仙人といふ物かと。画図の面を守り詰。奇異の思ひをなし給ふ。

三輪大臣笏取なをし。あの絵姿は鳥飼の後の帰依し給ふ。新羅の国の法明国師。伝来有し釈迦牟尼仏。是をもつて君を諫る事。其例なきにしもあらず。漢の(二オ)明帝は金色の人を夢見。仏法を信じて天下を治め給ふ。我朝の神道に。唐より儒道渡つて。略世に行るといへ共。今一つ闕たるは仏道。此三つの道は。譬ば鼎の三つの足のごとし。神儒仏の三教をもつて。政の助ケとし。君の御行跡を改メ給はゞ。御代長久の基これに過べからず。法明国師に仏法の大意を。勅問有ルやうに後の御内意を蒙り。鴻臚館の客預り。当麻の次郎速風に申付ケ置候。それくと有ければ。速風はつと座を立て。伴ひ出る。

新羅国の沙門法明国師。白氎巾を頭に載き木蘭色の袈裟衣。文余の柱杖に赤木の珠教を(二ウ)つまぐつて。いとも殊勝に。参内ある。

平群の大使主嘲 笑ひ。あの絵図といひ其者のごまといひ。異形異類の物を取よせ。有難そうに。ぶつとやら法とやらが。御代長久の基になるとは胡乱く。此高鳥が奉る所の絵図の美人は。肥前の国松浦の山官雪則が。忘がたみの乙娘の佐用姫。是を召て御酒宴の友となし御心を慰め給はゞ。君の御寿いく久しく。是こそは御代。長久の基たるべしと。しかつべらしく述べらるれば。

階下に叩へし当麻の次郎す、み出。下さまの詞に。一時の榮花に千歳を延ると申せば。高安上の山御所へ佐用姫を招れ。

叡慮えいりよに叶あははぬ時は例れいの御み（三才）手討てうちと。傍若無人ぼうじやくぶしんの二人がすゝめに。法明国師ほふめいこくし膝立ひざたてなをし。仏法信心ぶつぽうしんの大檀那たいだんな。鳥飼とりかいの後の頼たのミによつて来れ共。かゝる悪行あくぎやうの臣下しんげを。用もちひらるゝは君の愚昧ぐまい。我われひそかに聞きク。帝みかどには罪つみなき人を殺して。其血ちを酒さけとなし給ふ。是鬼口きこうと名付なづし病やまひにて。則鬼おにの口くちとよむ文字もんじ。正ただしく現在げんざいに。鬼畜きちくの相さうをあらはす業病がうびやう。魔界まがいには居あべからず。帰去来ききよらい。くゞと彈たん阿あして立給たてふを速風はやかぜとゞめて。ヤア日本の音ねを覚おぼはつゝ、詞遣ことづひもしらず。君みかどに向むかつてもなき雜ざつ云ん。今一度ぬかして見よ。舌したの根切ねきつて切りさげんと。反打さうかけても。恬しつりとしたる悟道ごどうの有あさま。三輪さんりんの（三ウ）大臣だいじんア、こりやく／＼当麻たうまノ次郎じちやう。忝かたじけなくも鳥飼とりかいの御后ごごう。近ちかき比ひより悪阻おその御惱ごなやみ。兼かみ而御平産ごへいざんの祈いのりに。教給けうきつふ帰依きゑ僧そうにあら氣は無用きは無用。仏法ぶつぽうをもつて邪よこしまを正ただす事をいはゞ。今高鳥たかとりの差上さしあられし。あの絵図えずに執着しつじやく有あり。佐用姫さようひめを招給まねふは邪姪じやくといふ物もの。ム、其前置まへおきの詞ことば。此高鳥こゝたかとりがしるまいと思おもはるゝか。十八年じゅうはちねん以前いぜん唐たうへ渡わたりし。大友おほともの金村かねむらが一子ひとこ。宿祢狭手彦すくねさでひこは御辺ごへの孫まご。それに云号いひなうけの有ある佐用姫さようひめなれば。仏ほとけの教おしへに事をよせ。とめ召めるかとなり込こむれば。ホ、主有ぬしる佐用姫さようひめなれば。とゞむるが君きみへの忠義ちゆうぎと骨硬こつかうの。臣下しんげの詞ことばを用もちひぬ叡慮えいりよ。御簾ごせんさつと捲ま上あさせ。武烈天皇ぶれつてんかうあららかに檻おぼしに出い御有みり。（四才）釈迦しやくかの御影ごみえいを引ひつつかみ。国師こくしに打付うけ逆鱗ぎやくりんの御みまなざし。ヤアきつくはい成なる異国人いこくじん。鳥飼とりかいが帰依きゑすれば命いのちは助たすぐる。九州くしゅうの地ちへ。はや追放おひはなと有ありければ。法明国師ほふめいこくし悠々ゆうゆうとして。エ、ほいなしく。我われ大願だいがんを満みずして本国ほんこくに帰かへる共。半百はんひやくの年数ねんすは過こさず。此土こゝに仏法ぶつぽうひろまらん事疑ことぎひなしと。罵ののしり給たまふ国師こくしの今の御み詞ことば。当あたれるかな五十年ごじゅうねんの後のち。新明帝しんめいていの御み時とき。仏ほとけの道みちの伝でん来らいせし。最初さいしよの機きは此時このとき也なり。天皇てんかう猶なほもいからせ給たまひ。ヤア詞多ことおしあれ引ひつ立たよの類しゆりの論言ろんげん。速風はやかぜにうながされ退出たいしゆつへある折せこそあれ。召めによつて参内さんだい

と披露して。武臣大友の宿祿狭手(四ウ)彦。執権英。太夫美知儼を召つれ御階の。もとに平伏す。高鳥見るより。ヤア
く狭手彦。今日の御召は某が計ひ。云号の縁を切つて。佐用姫を君へ差上なは。汝が兼々。我を頼みし入唐の願ひ。吹
嘘して得さすべしと。聞もあへずさよつとして。返答なければ天王大キに御感有り。ホ、高鳥がよき裁配。先帝在位の時。
唐におゐて謀叛の機有ると。ふしんの立し金村なれ共。朕を位にす、めし好を思ひ。父が罪をとがめず。狭手彦を武
官に下して。今迄は一命を助置しが。佐用姫をおしまば。きつと計ふべき旨有りと。のつ引ならぬ勅命に。ハ、はつと
計に。猶予すれば三輪大臣。ア、此百枝が。孫の様子もない不覚もの。(五オ)お請申て物うき都を立去。日比の願ひ叶へ
る所存もたざるかと。心をこめし一言に。宿祿狭手彦さし心得。云号の佐用姫が事は。恐れながら君の御心任せ。唐渡り
をゆるされしは我本望と。お受申せば。高鳥眉に皺をよせ。三輪の大臣の今の詞の端々読たく。孫の狭手彦に都をひらか
せ。先帝の立太子。越前の国の配所をぬけ出。行衛しれざる玉穂の宮を守立。謀叛おこせといふ事かと。詞の内より英大夫。
ヤア百枝公の一言を剩にし。主人狭手彦。玉穂の宮に謀叛をす、むるとは。かりそめながら一大事。イヤ老ほれめ。倍臣
の分際で。此高鳥を拒む。緩怠至極と双方色たち。見へければ。
天王桓々たる(五ウ)御粧ひ。ヤアいはれざる争ひ。玉穂の宮のちつへいが謀叛をおこし。狭手彦がくは、れば迎いとほ
ぬく。倍臣ながらも英大夫は。鳥飼の后が実父なれば入唐の供は叶ぬ。狭手彦は心任に唐へおしわたり。父金村を誘
引して帰朝せよ。儀式は遣唐使の旧例に准ずべしと。威有てはげしき勅。しづくとして入御なれば。かゝる時節に大
友の家の誉の末長き。唐舟の。日和もよく。さかゆく。国こそ三重へ久しけれ。

当今武烈天皇妍たうりんよき女めを好このませ給中ひ。松浦ウの山官さんくはん雪則ゆきのりが忘わかれがたみの乙娘おとめ。佐用姫ウこそ美人びじんの聞きこへあんなれ。入内じゆだいさせよと頻しきりの勅命ちよくめい。本国ウ肥前ひぜんの国くにより舟出ふなでして。帝都ていとも近く鳴尾なるせがた。いや、(六オ)うるさと姫君ひめぎみの心こころにしたふ恋人こいじんは。そのかみ先帝ウの御宇もろこし唐ウへ渡りし。大友ウノ金村きんむらの一子ひとこ。宿祢ウ狭手彦さでひこに云号いひなづけは有中ながら。まだねぬ殿御とのこに義理立ぎりたててとけぬ思おもひを糸竹いとたけにのせて。まぎらす舟屋形ふなやかたそれをしよざいの船頭せんとうより。姫ひめの機嫌きげんのよしあしに。お傍付そばづきの秘共ひつき。楫取かぢりかぬる計はかりなり。松浦地ウの家の執権しじけん。兵庫ひやうご之介すけ幸満よしたるとて。佐用姫ハルの姉あね智ちながらも礼儀れいぎみださぬ主ぬしあしらひ。姫君ひめぎみへ申上まをます。召よれも付つけケぬ長の船路ふなぢ。おつかれもませぬよの。お傍そばに居あてさへ心こころならねは。国くにもとの御みノ母かうしつ後室ご様さま。嗚なお氣遣きぢいに思おもひめされん。云号いひなづけの狭手彦さでひこ殿どのに。何なにとぞそはせ申まをさんと色々しよじやくと心を(六ウ)くだけ共とも。邪じま非道ひだうの武烈天皇たうりんの勅命ちよくめい。辞退じたいすればお家の破は滅めつ。都ウへ登のぼり給たまひなは狭手彦さでひこ殿どのの母ははかたのちい君きみ。三輪さんりんの大おほ臣おみ百枝ももえ公きみを頼たのみ。いかにもして云号いひなづけの殿御とのこにそはせ奉たもらん。お心こころ慥たしかに思おも召まをせと諫いさむる詞ことばに。佐用姫ハル涙なみだにくれながら。去年こぞの春はる先立まへ給たまふ父上ちちのうへの遺言ゆひげんには。新しん參さんながらも兵庫ひやうご之介すけは家いへの為ために成なる者ものとて。自みづかが姉あね清瀧きよたき様さまと。夫婦ふうふにして給たまはつたが今の浮身うきみの力ちからぞや。故国こくにの多おほびすにおくられし唐土人たうどじんのうき歎なげきも。是こゝにはいかでま上さるらん。思おもひやつてとふしまろび。歎なげき給たまへば。ア、是こゝ々々姫君ひめぎみ。今更いまぐどくとおつしやれたとて。思おもふ殿御とのこにそれはれもせまい。あれく御覽ごらんせ向むかふは武庫山むこさんあはち島しま。月夜つきよのけしきも又一また一景いっけい。ほんに(七オ)昼ひるなら一入ひとしほと。秘ひそ共ともがまぎらせば。佐用姫地中遙はるかに見みやり給たまひ。自みづかを慰なぐさめんと姉あね智ちのお前まへにお心遣こころづひさせます。イヤ詞是拙者しづせうは御家来ごけらい。姉あね智ちあしらひ必御無用かならずなげなからず。私わたくし女め夫をともとはどれ合あひ。後室かうしつ様さまま、しき中の義理ぎりを立たて。清瀧きよたきに家名相統かめいさうとくさせんとて某たれに娶めあはせ。血ちをわたしたこのさよ姫ひめは。他家たけへ嫁よめらすと狭手彦さでひこにいひ号なづけ。イヤ。よしない身のうへ咄はなしに夜よもふけて候まち。夜氣やきを払はらふ御酒ごしゆ一つ。

サア／＼女中と打こんし。我らも寢酒に致ふと。数々めぐる。酒たけなはにふけ渡せば、風かもてくる声のあや。やらんくめでたいな。君と我中。さ、れ石のな。ノウキ、やつたか皆の衆。聞クに嬉しい舟哥。やらぬ／＼とは此（七ウ）舟を都へやらぬといふ事か。何地の人の舟なるらんとの給へは。

兵庫之介きつと見て。ヤア女中がたあれ見られよ。遣唐使大友の宿祢狭手彦と記したる高桃灯。恋のやみちを照した手番。賀君の御舟が。此所にか、りしは御縁の深き。お嬉しいやらほにあらはれたと。はや舌のねもほろ多ひ機嫌。

姫は飛立ツ心をしづめなんのいな。是程明暮こがれしたふ自捨て。唐へお渡りなさんす。むごいつれない狭手彦様ンに。さのみ輪廻は残らぬと。兵庫之介に。油断させん姫の発明。姫共はくみ取て互にうな付袖引あひ。ソレ／＼叶はぬ恋にお心をいためず共。さあ／＼早ふおしづまりなされませと。いふにめれんの兵庫之介然らば拙者もふせりませふと舳の。（八オ）

一間に入れれば。

舟屋形の障子ひらかせ。大友の宿祢狭手彦。まだ青衿の身なれども。遣唐使の勅を蒙。父金村の生死の行衛を尋んと。末し波の海の面。うさ打はらす鼓をしらべかくとなん。今より後は通ふまじ。契りも今宵計り也と。ねんごろに語れば。さすが別の悲しさに。帰る所をしらんとて。おだまきに針を付。もすそに是をとち付て跡をひかへてしたひ行かくと聞よりさよ姫君。舟の面にまろび出。是申狭手彦様。自を捨て唐土へとは何ことそ。ほんにつれない契りも今宵計りとは。気にかゝる事ばかり。恐しい帝様にまねかれて。都へおもむく舟の上。こがれし君に出合しもむすぶの神の引合せ。物いふて給はれとなげど。くどけとよそふくあらし。（八ウ）波や鼓の音にまぎれて聞へぬそうなど。姫共舳先にたぐりし錠

の綱つなに取とつつく小石こいしひろい集あつめて狭手彦はるの。召よたる舟ふねへばららくく。

姫君ひめぎみ様御覽みかんなされ。今いまの小石こいしが首筋くびすぢもとへあたつたそうな。せなかへ入いたるあれく立たてゐゐずまゐゐなをして。きつとした殿どのぶり。すいた風ふうではないかいの。あれあれを見て姫君ひめぎみ様どふも身みも世よもあらまれまいと。そそやしし立たられれささよよ姫ひめわわつと泣な出し。わしや石いしに成なたいく。石いしに成なてもああなたのお傍そばへ行いきたいと。今いまの歎なげキの詞ことばの末すえ後にのちにや思おもひ合あ合あすらん。

宿祿すく狭手彦はる拐かひの口迄くちま歩あゆみ出い出で。父金村ちちのむら殿某どのが五歳ごさいの時唐土たからつちへ渡わたり給たまひ。十八年じゅうはちねん以来このち生な死しの程ほどもしれれざるを尋たず行ゆく此こゝ狭手彦はる。帰朝きよてうの時節はかりも計はかりがたし。おおこととが母ははも合意うのうへ都みやこへ登のぼるれば。君きみの御心みこころに随したがふが。却かへつて而母ははへの孝行かうぎやうぞや。(九才くさい) いいひ号なづけあれればとて我われをしたしたふははみれれんく。イイエエくくなんんぼうぼうううみれれんでも母はは様の合点あつちでも。武烈ぶれつ天皇てんわう様に随したがふ事ことはわわししやいいやく。心こゝろの誠まことがととゞゞきし故思こゝろひがけななふ舟ふねとくくにつつなながる縁えん。いつそ爰こゝから其そのお舟ふねへと。既すでに飛とんんず有ある様に。狭手彦はる驚おどきヤアやあ秘共ひこそれとゞめよと有あれば。御おん邊へりの小坊主こぼうずが。心聞こゝろせて走はり出い出で。申まをささよよ姫ひめ様。ここちの且那やまたはぬれれ好すなれ共ども。はままつてはぬれ過する。まだ新枕にまくらの姫君ひめぎみに板橋いたはし渡わたして参まゐらせんと。舟ふねから舟ふねへああゆゆみを渡わたせば。ここはい所ところも殿御とのこ故心こゝろは先まへゆゆぶぶつつく板橋いたはし。女中にようぢゆうはははああくくきへ入いり思おもひ。ななかかば渡わたればわわななくく。両手りやうてを。板いたに身みをちちゞめめなんんなく向むかふへ乗移のりうつれば。宿祿すくも心飛立こゝろ計はかりり。互たがひにひしとといいだだき付つク。君きみが綱手つなてに下紐したひももとけてくくちせぬ屋形やがたの内うち。障子しょうじささすすのが(九ウ)相あひ図づにて。深ふかききいもせの始はじめなり。秘共ひこは手てを打うて。扱あつてもああの坊様ぼうやうの氣き転てんのきいた事ことははいいの。ぬれ者ぬれものの家来けらいは又また格別かくべつ。歩あゆみみの板迄いたまああつちへ引ひいて。姫君ひめぎみ様の身みに取とては痛入いたみつた御馳走ちそうじや。お帰かへ有ある迄までここちともねて。夢ゆめに成なとああんな馳走ちそうに逢あひひたいと御座みざの一間いっけんに入いれば。牛うしみみつつ告つる比ひしも過すぎ。千鳥ちどりなくくねねや波なみの音ね。風かぜさへ四よ方ほうにふふけわわたる。

兵庫之介幸滿は枕時計の目さましに。明がた近しと舳の間より。立出て。ヤア／＼水主かん取共。都より急の御召。風がなをつたれば片時も猶予成がたし錠の綱も切放し御舟やれと気はいらたて。ゆふべの酒の持こしか。姫君のお寝間の方に気もつかず。帆を十分にあげさすれば。たもつ嵐に真共の一走。主をとられし家来はうつかりうつほ船。都の方へ（十オ）吹送れば。浪きる音におこされて、こなたの舟にも櫓の手を揃へ。君と君とがね入ばな。初にあふ夜の夜をこめてあすの。思ひはしらぬひの筑紫路さして三重へこがれ行ク。

波風の。あらしき浮世を。こへ越る。大和河内の境なる。高安上の山御所へ武烈天皇行幸有。殿上地下のわかちなく昼夜をわかぬ御酒宴の相手とて。主有ル人の妻娘妍よきを奪取り。賤女の十二の局と名付ケ。例も希なる御物好。夕の寵愛朝の手討哀にも又喧し。

世挙てくもる雲ぬに曇なき。三輪の大臣百枝公。狭手彦が老臣英大夫美知雛を召つれ。禁聞より退出の折待受て田舎侍。三十計の女を伴ひ罷出。率爾ながら。三輪の大臣（十ウ）様と見受御願申上る。昨日龍田の紅葉見の場所にて。平群の高鳥公に奪れたる田舎娘。何とぞ御戻し下されかし。是へつれしは乳母。主をとられ申訳なきとてうろ付キ難ク不便さ。拙者も同国ゆかりの者。御聞届ケ下されなば。お情にもお慈悲にも。此上の有べきかと思ひ。入ッて言上すれば、三輪の大臣聞召。先刻御所にて。其田舎娘に対面し。委様子は竊に此百枝が聞つるが。あれは越前の国の住人大野の長者が娘照日の前。汝は同国あぢまの、流人。玉穂の宮の御家来野見の弥綱太有熊と。仰もあへぬに。イヤ其義はと驚ク面食見て取ッて。ホ、世を憚り。宮の御使にさへ照日の前を。差越る、程のしぎなれば、心置る、は尤なれ共。是成は身が孫狭手彦が

(十一才) 郎等。英大夫といふ者。則あの者に申付ケ。照日の前は追付。此御所を逃す手はづとの給へば。コハ有難キ御計ひと。お乳諸共に弥綱太が悦ぶ事は限なし。老人ながらも大夫めばやく。アレく十二の局の親類共。召によつて是へ参る。はやく二人は麓へ下つて。照日の前を待合されよ。道をかへて此嶮伝ひと。美知儺が差図にお乳を伴ひ弥綱太は。麓をさして立帰る。

かゝる所へ手討にあひし局方の親類共。老も若キも打しほれ御門の。外に相詰れば、英大夫す、み出今日の御召は旁が願ひの通り。お手討の局がたの骸を給はる。受取て此御所の後の嶮に葬るべし。鳥飼の後弘法に御帰依有り。十二人の局の塚と共に御后も逆修を立(十一ウ)られ。都合十三の墳墓を築せ。なき人の菩提を弔ひ給ふ御志。有がたく思はれよと云聞すれば皆一同に感し入り。其様なお慈悲ぶかひお后様とはしらずして。愷氣故にお手討をす、め給ふと今迄は恨ました。御ゆるされて給はれと悦ぶも猶涙なり。

百枝公も哀を催し。はやくとくくとの仰の下御門の。内より持出るは最初のお手討首に添たる付ケ札に。芳野の前と記たるは。いか成ル者の娘。なるぞと尋れば。

六十余りの親仁が見るより。御所では芳野の前共いへ。内での名はかやと申て奔走娘。しぶり皮のむけた故男ゑらんで嫁もせず、首はころりの衣がや。あまやかしたにかはいやと涙ながらに。受取ル跡より出たるは。柳本の楊枝屋。房と申て拙者が女房。首に(十二才)成たは首だけの。夫婦の縁かと手に取れば。二八計りの娘の切首。梅の内侍と聞よりも。なふそれこそは私が娘と。走り寄たる筆屋が妻。筆の命毛いつの間に。書切られたる首なるぞと。歎きしづんで気も魂も。

飛火の野守の百姓として。よろめき出たるしらがばゞ。息に離て程もなく。まだ若後家の嫁をお上へ召上られ。母を尋て泣孫に。老さらばふて世話をやく。小野の里の炭焼。女房と妹と其上に。娘迄を権付に取上られ。首にしてお戻しはあんまりむごいと力なく。立ッも有り。

伏見の里のうかれめ三人。親おや方がそれく。首の受取渡し有。敵の跡より持出し。桃李の花のしほめるごとき死顔は土市郡の住人。佐伯(十二ウ)の真人が兄弟の。花井玉井といふ娘。むなしき首を申受しほくとして皆々。御前を立ければ。此趣を后へ御披露申さんと大夫は。御門に入にけり。

暫く有て仕丁の姿に身をやつし。にげ出るは照日の前。それと見るより三輪の大臣御声ひそめ。コリヤ照日の前。最前宮の御家来野見の弥綱太。おことが乳母をつれ来て。此麓に待合す。某も今一応玉穂の宮の令旨の趣。とくと承つて御返事を申さん為と。詞を改メの給へば。はつといらへて照日のまへ。ゑほし白張かなぐり捨。深くつゝしむお使なれば。弥綱太はよそながらに供させる。狭手彦へ近寄り宮方の惣大将にたのめと有ル。其狭手彦様は。唐へ渡り給ひておるといひ。思ひもよらぬ(十三オ)自が身の災難。国もとへ立帰て。宮様へ申上ん詞もなしと。めもおろくと涙くむ。ホ、道理く。おことが宮になれそめしはいつからと。問れて照日は顔あからめ。恥かしながら其初恋は去年の水無月。国もとの日永が嶽の祭の夜。玉穂の宮様も福井の町の隠家より忍んでの御社参。私は乳母と只二人り。いとらしいお見様じやと。思ひ初しが縁の始。一夜のお情忘れず。父母の目顔忍んで。文の取やりはわたしが乳母と綱太殿。日陰のお身の宮様をよくく。大切に思へばこそ。堅くろしい父長者殿をすゝめく都上り。どうぞ此度の使の規模の立つ様に。お頼申上ますとゑ

しやく参りてかはいらし。

三輪の大臣もくくと打うな付き。ヲ、始終を聞て安堵せり。孫の(十三ウ)狭手彦は。親金村が行衛を尋。唐土へ渡つたれ共。此祖父が一簾のお返事申すと。東帯の下に隠しもたれし一箇の箱の蓋おし開取出し給ふは。暉渡る錦の御旗。見るよりはつと照日の前途。飛のき敬ば。ホ、ウ何弁もなき女心にも。自然と恐慄は。神代より伝し此御旗の御威徳。是を以て諸国の官軍を集メ給へと。玉穂の宮へ奉られよ。且又三種の神器の内。神璽と八咫の鏡は先立て奪取り。石上の神職清友に預ケ置キ。宮の御代にならば早速差上る兼而の契約。宝剣は帝の御心あらく。不断玉体を離し給はねば。取掠に隙なしと。本のごとく錦の旗を箱に納め。懐中硯の筆おつ取て。秘符をとくと取認て(十四オ)渡さるれば。照日の前はおし載嬉しさ余りて詞も出ず。只ふし拝ば。ホ、嬉いは断り。某とても最早浮世に思ひ残す事はなし。御旗の詮義。宮がたへかゝらぬ一つの術の書置ぞと。筆おつ取て禁門の下馬札に。墨くろくと。神璽御鏡。并に錦の御旗を奪取て身退もの也。三輪の大臣在判と。筆ばやに記給へばコレ申。それは余りな思しきり。存て宮様のお為に成て給はれと。すがるを突のけ。年寄ツた某。宮方へくは、つて何の御役に立ん。よしない事に隙ごらずと。汝は此場をはや立のけ。弥綱太が待合す麓の方へは其道筋。坂を下りにとくと有ければ。

山御所の。

みかうし参る音にもあらず。御門の内俄に騒ぐ其折から。櫛原兵同岩宗。松浦の家の執権兵庫之介を伴ひ来れば。平群

の高鳥あはた、敷クかけ出。ヤア／＼それへ見へしは櫛原兵同ならずや。昨日身が手より奉りし田舎娘が逐電したれば。天皇の逆鱗恐し／＼。同道せし武士は何者。尋出す思案はなきかと。いふに兵同謹而。田舎娘が逃失たるにかて、くはへ。申上るも気の毒ながら。召連たるは作用姫が傳。兵庫之介にて候といはせも立す。ヤヤ扱は佐用姫が病氣といひ立。入内延引の申（十五才）訳かと毛色を。そんじて見へければ。

櫛原兵同イヤ兼而某と。兵庫之介懇意なれば。折入ッて意内を承るに。さいつ比鳴尾の沖にて。遣唐使狭手彦に。姫を奪れ候と。聞クより。恟ヤア兵庫之介。それを今迄禁庭へなぜ隠したときめ付ッれば。イヤ其御咎は去事ながら。勅命を相守り。一旦姫を差上したれば。国本の母の後室に御ふしんはかゝるまじきが。奪れたる某。誤一へんのいひひらきに。腹切て相果ても。主人の家の破滅となるがなげかしく。姫が病氣と偽リ二三ヶ月も首尾を見合わせ候所に。国本より申来ルは。狭手彦が唐土への出船を悲しみ。松浦の磯と申所にて。さよ姫の歎死。（十五ウ）其形石に成しとの珍事。最早つ、むに扱なく。君への伝奏高鳥公の御憐愍。御取成シ願奉ると詞を尽申にぞ。イヤサ田舎娘を取逃した其上に。さよ姫が石に成たとばか／＼しい事がいはれる物か。差当ッて帝への申訳には儕が首と。すはと扱て切てかゝるを兵庫の助ひつぱずし。彼に立たる下馬札小楯に身をかはすを。かさにか、つて切付れば。

櫛原兵同きつと見付。ヤアさよ姫が詮義所でなし。あの下馬札の書置御覽と氣を付られ。平群の高鳥説も終らずコリヤどうじゃ。朝家の御宝神璽と御鏡。并ニ錦の旗盗取て。三輪の大臣が身退との文言。ヤイ兵庫之介。大友家へ姫を相對で渡さぬ証扱。狭手彦が祖父（十六才）三輪の大臣を生捕が何よりの申訳。ハ、ア三輪殿を召とらば狭手彦と一でない。御

疑ひはらされふや。エ、くどい。時を移さずはやくむかへと。兵庫之介を追やつて。ヤア、櫛原。某は三輪の大臣が逐電の様子奏聞せん。汝は逃失たる鄙娘を召捕来れと。立別てぞ三重へ入あひの。

刻限告る太鼓の音。谷にこたまし梢をならす秋のかぜ。いと物すごき山原に。仏乗帰依の御后。鳥飼の君の逆修の五輪を中央に立。手討にあひし十二人の局に。十二月の異名をもつて贈号とし。以上十三の憤墓を築れしより。仏法初の事跡と成り。十三峠と名に高。山路をてらす高桃灯まつさきに押立させ。三輪の大臣が行衛を直に尋んと。武烈天皇（十六

ウ）那羅延力士のあれたる勢ひ。鬼髪すつくと逆まき上り。太たくましき。龍馬の背骨に打跨。手網かいくり出御有ル。松浦の執権兵庫之介幸満不敵にも馳参じ。三輪の大臣のあへなき御首を觀覽に備へ恐れ。入て平伏すれば。

天皇赫々たる龍顔完爾と美しく。先達而高鳥が披露にて聞ク。三輪の大臣が討手に向ひ首取たる儻は。さよ姫がめのと兵庫之介よな。其僻者擒て来りなば。鉄銅を火にやかせ炮烙の刑にふして慰んず物。エ、残念くと宣旨あれば。さしもの兵庫身の毛よだつて漸に頭をあげ。神璽御鏡錦の御旗を奪ひ取し。三輪の大臣殿御詮義ある運勅の人擒らんと存じたれ共。某が討（十七オ）手に向ふとひとしく腹めされたれば。是非なく首討て候と謹而のべければ。ホ、さも有なん。三輪の大臣を手につけ。狭手彦に荷担せざる申訳を相立たれば。はやく本国松浦へ立ち帰て。さよ姫が生死狭手彦が行衛を詮義し。此上の忠義を顕はせ若。背くにおゐてはうぬら一家が滅亡。必ぬかるなはやうつ立ときびしき論言。ハ、はつと計に兵庫之介。毒蛇の口を逃し心地本国として急ける。

時に御所のかた騒く四めに響くときの声。平群の高鳥大息に成てかけ来り。扱も十二人の局の親類眷属。佐伯の真人を

始として。君を恨奉り北の山手より押よせ候所に。当麻の次郎速風御所へかけ付ケ大方に切静候と。奏聞すれば。天皇甚逆鱗有。ヤアにつくきうんざい共の一揆打。当麻の(十七ウ)速風が手に余らば。朕が直にかけ向ひ鑿にするぶんの事。今日逐電したる妍よき田舎娘が行衛はまだまだしれざるか。高鳥いかにと匈給へば。さん候樅原兵同に申付。討手に差向ケ候と奏する所へ。てるひの前に繩をかけ引立来れば武烈天皇。詞、樅原能したりな。其女が縄めに苦み。泣沈たる面体のあてやかさ。むざくと殺すのも便なしと。はれくとして見とれ給へば。

照日の前は氣も魂も身に添ず。只わろくと泣計。傍で見るめもいぢらしし。いかゞはしけん帝の龍蹄。四足を踏で高嘶身ぶるいしてもだゆれば。ホ、面白しく。朕が乗馬あの田舎娘に見入レしと覺たり。はやくいましめの繩とけ。馬にかけて見物せんと。玉体ひらりと下立給へば。高鳥(十八オ)立寄照日の前が繩引ほどき。向へがはと突とばせば。こはさ悲しさかつはと伏て声を上。責も多キに女の身を。例希なる御計ひ。身は八裂にさかれても命は惜ぬ。一思ひに殺してたべ。せめてものお情ぞやと。くどき立く正体。もなく泣しつむ。

主上巖に乗御有り。はやく其馬引出せとの勅命に。供奉のめんく高鳥始め。馬と人との女夫事。見て樂んと前後左右を追取まけば。照日は泣く立上り。肌に付ケたる錦の御旗の威徳にて。今のうきめを救せ給へと心中に祈念をこらし。おつ立られて嘶けるをかくゞり。御旗の箱を振の袂におし隠し悪馬の面にさし付れば。四足を折てわぢくぐ手飼の猫の。そばゆるごとく。神明加祐(十八ウ)の御旗の威徳と。心つかねば天皇高鳥笑ひを催し。馬めが女にしなだる、と。余念もなげに見とる、隙に。照日は心に猶々祈願怠なく。かけ寄てひらりとのれば。馬はずつくと立上り。か

け出す嬉しさいさみの手網。案に相違しこはいかにと櫛原兵同。仕丁のめんく一度にかゝるを蹄にかけて。蹴たて踏の
けかけちらされて。脚腰た、ぬほへ類逃つら。つゝいてかゝる高鳥を十間計り蹴とばせば。

剛強勇氣の武烈天皇。飛か、つて馬の尾筒を御手に取て。引とめ給へば。神力くは、る照日の前。かくを入れて一トあを
りぼん。ばかく奔馬の勢ひ。こりやくくと天皇の。天にもひびく御声は山に轟どろく。蹄にけたつる砂ほ
こり。馬の嘶轡の音はりんく。 (十九才) りんと乗たる照日を守りの神かぜ山かぜさつくさ。さしもにたけきあ
ら馬を後にどふどねちすへ給ひ。照日の前の膝つかんで。既に危く見へけるが。時にふしぎやと十二の局の墓より。数
点の神火烈々ともへ立て。山谷一度に動揺すれば。武烈天王うんとはかりに悶絶有ル其隙に。御旗太事と照日の前底はかと
なく落て行。

跡には夢のさめたる御気色。ヤア女めは何国へ逃しと。踊出んとし給ふ所へ。櫛原兵同岩宗遙に馳付キ。鄙娘が逃たる
は東の坂口。某追かけ申さんとひしめく向へ飛で来る。野見の弥網太手比の大石片手に搦で打付れば。岩に打れて岩宗
が。目玉飛出て死てけり。

綱太勇で (十九ウ) 大音上ケ。玉穂の宮の傳野見の有熊。恐しながら玉体に。主君の恨受取給へと太刀に反打話かくるに。
天王ちつ共驚き給はず。ハ、くくく普天の下率土の濱。朕に敵たはん者覚なし。宮が家来といひ。今岩宗を手にかけたれ
ば捻殺す筈なれ共。野見の有熊と聞けば。寵臣当麻の次郎が遺恨有ルやつ。此場の命は助れ共。儕が首は当麻が物帰れやつ
と睨付給ふ眼力に。思はず有熊氣を打れたちくくとたちつく膝ぶし踏しめく又かけよれ共弥網太が五体委は王位の

勢。ひるまず向ふは勇士の劬。睨で別る、瞳の光は秋の電梢をてらし。岩根松がね踏ならず所は山路の酒の池。肉
の林を粧ひし異国の例を日のもとに。類。希なる。君が奢の五逆十惡十三峠の古事を世の。諺につらねける（二十
オ）

第二

仏日西天に没しいまだ日本に其機熟せされ共。や、民間にひろこりて讚仏乗の始とかや。当今武烈天王の御后鳥飼の
君。仏法僧の三宝をたうとみ。高安上の山御所にて無道の帝の御手にかゝりし。十二の局の従類眷属。上を恨の一揆を起
し。山御所の騷動斜ならず。

武臣大夫の狭手彦が郎等。英。大夫美知儼が裁配。后を乗輿に移参らせ。夜道をいそぐ龍田越。川辺に車を止め置き。供
奉の青侍を追返し皇居の。安否を窺ひある。

かゝる所へ後の御養父。平群の大使主高鳥。従ふ仕丁はむれる白鷺。（二十ウ）羽音もかくやとあはた、敷ッかけ来
り。ヤア〜英大夫。汝が主人狭手彦。帝の御心をかけられし佐用姫を船中にて奪ひ。入唐したれば同罪に行べき其方。鳥
飼の後にめんじゆるし置るれば、娘程大切な物はないと。帝の事は打やつて。はやくも爰へ小出ししたな。コハ高鳥公のけ
しからぬ御シわる口。もとは拙者が子なれ共今ではこなたの御息女。殊に御懷妊の御后。あやまち有てはヤアそうはいは
せぬ。いかに后が太切なればとて。帝の御大事には見かへられまい。お手討にあひし局共の親類が一揆をおこすやら。弥綱
太といふ太力があはれるやら。一切おこれば十切おこる大騷動。英大夫山御所へひつかへせと。争ひつものる父と父直と曲

は。見へすく御簾を。まき(二十一オ)上ケテ。車の内より鳥飼の御后。なふ太夫。是迄の心遣ひは嬉しけれ共。山御所のさはぎまだしづまらぬと有からは。はやくはより引返し玉体を守護し申されよ。山の御法をたうとみ生死一如と聞時はなじかは。けがの有べきぞ。我は車に一睡の。夢に世上のうさを忘んはや。とくく急れよと御簾さつと下ければ。

跡を氣遣ひしほる、英羽をのす高鳥。大夫つゞけと引つれて。山御所さして急ゆく。梢より嵐を染て。ちる紅葉。龍田の川辺。うろくと。旅装束にて来る人は。越前の国あぢま野に隠なき大野の長者下部にむかひ。娘照日の前此所の紅葉見物とて。旅宿を出しはきのふの朝。平群の高鳥といふ人に(二十一ウ)奪ひとられしとて。供の者共は残らず戻り乳母一人が戻らざるは娘を共に。武烈天王の御所へ。召とられたりと覚ゆれば。最早外を尋ルに及はず。見れば彼に女車。あれこそはよき手が、り。そち参りてよそがら姫が様子を。問てこよといふ所へいきせきと。かけつてくる二人りづれ。

長者目ばやくヤア娘照日。乳母ではないか。ホイ旦那さん。父上かいのとすがり付たる親と子の。嬉しさ類はなかりけり。お乳の人心をしづめ。きのふの朝よりお姫さまを高安上の山御所へ奪れ。取戻してないでは国本の母君。波の戸さまへいひ訳がないおのれやれと。思ふた念が届き。野見の弥綱太有熊様といふお侍に出合。其お世話で養ひ君の危所を遁れ。お供して帰りましたと。語る(二十二オ)内より長者悦び。ヲ、其弥綱太といふ侍は。本国あぢま野に流人と成てござなる、。玉穂の宮の御家来。終にあはねど名はしつたり。手の反返す天王の御政道に恐れ。宮を伴ひ。七八年以来。其行衛しれざると聞しが。はれ思ひがけもない所で。宮の御家来のお世話になり。一旦山御所は遁る、共。北国に隠れもない。此長者が娘といふ事露頭の上は。逃帰りし後日の祟イ、エ。それは父上。お氣遣ひなさんすな。自が身の上はたつた一人。お

公家くげさんのお心見ぬいて明あかした計はか。其外中の人々には名いもない田舎人いなかうどの娘むすめと計はかり。本名ほんなは深くかくして置おさんした。ム、して其お公家くげの名はなんといふと。問とれてはつといひかぬる。

娘むすめが色いろめ見て取とル(二十二ウ) 長者ちやう。ム、扱とは其公家くげとそちは恋こせしな。それはともあれ。跡あとの跡迄あと汝なんぢが身みの上うへ。つ、みかくして給たまるか。アイ其お公家くげさまの。御深おん切せきな事こと見て下くださんせと。乳母うばに持もせしふくさ物ものを取と出し。コレ此箱ここのはこに納いめ。封ふうの付つけて有あルは御所ごしょ様の御意ごいの切きれ。守まもりにせよと自みづから給たまはり。念ねん入いておつしやる事ことには。今世いま上うへで。恙つがといふ毒虫どくむしが出て人ひとに態あするといへ共とも。それは偽いつはり恙つがといふ虫むしはない物ものなれ共とも。何なにによらず。時ときの災難さいなんにあふのが直すくに恙つがの虫むし。それをよけるは此御守このごまもりり。必封かならずをひらくなど。返かへすくいひ含ふめて給たまはりしと。玉穂たまほの宮みやへ奉ほうる。錦にしきの旗はたを。恙つがの守まもりといひなせし。恋この手て段だんぞ発は明めいなる。ヲ、汝なんぢが恙つがなく帰かへりしも。恙つがの守まもりの御威ごい徳とく疎そ略りやくには成ながたし。(二十三オ) 父ちちが預あるそう心得こころえよと。御箱ごはこひつ取とおしいたく折しこそあれ。

宮みやの傳つた野見ののの弥綱やな太有熊たいうく。小具足こぐそくに身みをかため韋駄天いだてんのごとくかけ来きり。ヤアく姫君ひめぎみ。おけがもなしにいしくも是迄こゝ逃にられたりと。聞きくより長者ちやうム、すりや其元そのもとが宮みやの御家臣ごけしん弥綱やな太殿たいてんか。同国どうこくのよしみとて娘むすめが義ぎをいかひお世話せわ。エ、其お礼れい受うてゐる所ところでなし。はや落おちられよと。あせるにさはがず。イヤ綱太殿ななたいてんに御意ごい得えしこそ幸さい。同国どうこくに有あながら。御行衛ごぎやうゑしれぬ玉穂たまほの宮みやの。御在ござい所ところも聞きたしと。いふを打うけしア、ゆるりつとした長者殿ちやうちやうだん。睫まぶたに火ひの付つ此瀬戸際このせとぎは。べ、付つて御息女ごめいむすめを。又天王方あまのてんわうへとられ給たまふな。あれくと。いひも果はぬに討手うつけの大勢たいせい。稻麻竹草いなまけくさとむらがり来きつて切きてか、るを。有熊うく得えたりと(二十三ウ) 渡わたりあひひらりとぬいたる打刀うちかたな。車輪しやりんに廻まして薙立なぎだくほいまくれば。

かひくしくもお乳の人照日の前の手を引つれ。うろ付く所へ長者弥綱太一所におり合。御塚あらば国もとにておめにか、らふ。跡は拙者に御任せ。然らばおさらば綱太殿。ヲ、御息女諸共はやお帰りと勸。ば。姫を引つれ大野の長者。是非なく其場を立帰る。

透をあらせず馳来は当麻の次郎速風。同じく着込に身をかため。大太刀ひねくり大音上。ヤアく流人の宮の候人。野見の弥綱太健に聞ケ。君の御ゆるしなきに都を徘徊するのみならず。御所をさはがす大罪人当麻の速風が討とめて。先祖の意趣をはらす観念ひろげ。ヤアおこがましき当麻の速風。(二十四才)表向の討手は差置。先祖の意趣とは何シじや聞ふ。ぬかせやつと。ねめ付る。ヲ、かくいふ某が先祖当麻の蹶速。汝が高祖父野見の宿祢と昔。垂仁帝の御時大内にて。力を角しより相撲といふ事始つたり。其蹶速の一字を取て。当麻の次郎速風と名のる。代々譲の力瘤。いざこい勝負といはせも立ず。ヤア儕が先祖。当麻の蹶速が力くらべでくたばつたを。手柄そうによくもぬかした恥しらずめ。此弥綱太こそ。野見の宿祢が三代の孫。高祖父宿祢。埴土をもつて人形を作り始しより。姓を土師と改め。其後又菅原氏を給はつたれ共。某は先祖の氏を名字として。野見の弥綱太と名のる事。生得相撲を(二十四才)このむ故。汝が望めばこつちも所望。いざ参らふと互に。大太刀からりとぬき捨。土俵入になぞらへてどうくくとふみならず。力足に堀うがつ。砂を結んでから手水さつと。別れて野見の有能声をかけ。尋常の相撲は力をためす一通り。是はそれに引かへて。汝が先祖の意趣はらしいは敵討も同事。野見の宿祢が古例を引腕ぞりにぶち付て。五体みぢんに。返り討じやが合点か。ヲ、くくくどい。先祖当麻の蹶速へ。勝て手向る此相撲。儕が腰骨ほつきく。へし折ルだんに詭言すなよ。うぬほへなよ。サア

こいやつと。既に勝負と。見へたる所へ。

是なふ暫しと鳥飼の御后十二ひとへに檜の扇。車より走り出。二人が中にわけ入つてとゞめ給ひし有さまは。仁王の相撲に

天人の。行司に入しも(二十五才)かくやらん。

后窈窕とたをやか成御声にて。ナフ兩人さきよりの争。車の内にて聞つるが。此勝負に弥綱太が勝時は。帝の逆鱗はかり

しられず。又当麻の次郎が勝つ時には。玉穂の宮の御無念はいか計り。銘々の僅なる遺恨より互の君の御憤を結ん

は。其身くの不忠ぞやと。是非をわけたる仰に二人。頭を大地にすり付てく恐れ。とかふの詞なし。

后重而。遠つ国にさすらへ給ふ玉穂の宮の御事は。自よろしく奏聞して。都へむかへ奉らんと申てくれ弥綱太帰れ。当麻の

次郎。はや大内へ供せよと優に艶き御粧ひ。龍虎といどむ両雄がはつとおうけは申せ共。腕なでさすつてコリヤ弥綱

太。配所より行衛のしれぬ玉穂の宮。大かた謀反の旗上ケも(二十五ウ)近々ならん。此相撲の勝負は軍中にて。めに物見

せるぞよ。ヨ、いふにや及ぶ。重ての勝負には。次郎うぬが首を洗て待。イヤごたくばらずとはや帰れ。ヤアこま事吐

ずと汝もはやく立されと。相撲のいきち武士の義理。後日の勝負に互の顔。うぬ見忘れな。儕もと。またかけよつて睨あ

ふ。搏鵬はた、く鷲。毛爪をみがく真中に。金鶏鳥や鳥飼の。后にいたく。制せられ別れ。くして三重へ立帰る。

波あらき。潮干の松のまつらがた。海辺に近き新館は。松浦の山官雪則の後室の隠居所。乙の佐用姫夫狭手彦。唐渡り

の別をおしみ。立し姿をめぐりの向ふの鳥の石となる。娘恋し。佐用姫恋しと明暮に。母の歎きに此浦を。呼子の(二十

六才)浜と人ごとに。よぶ名は四方に立波の岩かど。削る音迄も。あはれ催す類なり。

もとは当家の姉姫君。今は家老のおかもじと。なりふり軽き清瀧御前。打かけ姿。しとやかに。後室様をお見廻と。案内の
声に秘共。おい／＼に奥より出。けふは兵庫之介様。京都よりお帰りのさき走りが有し故。姉姫さまのお出を。母君さまに
もお待かね。イヤ是秘中。此清瀧を。姉姫さまと主あしらひはなんぞいの。今では家老兵庫之介が女房。詞をなをしてもら
はねば。つれ合兵庫殿に自が呵れる。犬も傍輩鷹も傍輩。皆そう心得て下されと。女どうしも武家方は作法正しき物ぞか
し。

お取次の女罷出。此浦の獵師共。後室様へお願ひの(二十六ウ)事有て。是へ参り候と。いふ間もなく中門より。サアおじ
や／＼と呼子の浦の獵師共。どや／＼と入来れば。

清瀧御前ひつ取ッて。こりや／＼浦人共。願ひ訴訟ならば。なぜお屋敷へはうつたへぬ。自は家老兵庫之介が女房。そち
達が願ひ。聞届てお取次申てやらんと有ければ。名主の平作にじり出。恐れながらお願ひと申は。過しころ佐用姫様。
聳君の舟を慕ひ。むかひ島の山へ登りて。悲しましやりましたあげくが。楠の枯木かなんぞのやうに。石に成て。つうくり
と立てござるお姿が。アレ爰からも見へまする。夜ルはあの石から青い火が出て。海の面へ映によつて。魚は恐れて。此
浦の網の手が上ります。それ(二十七オ)故の御詔と。皆口々に申すにぞ。

清瀧御前も涙ぐみ。むかし唐。武昌県といふ所の山にのぼり。軍に出し夫を慕ひ。こがれし、たる女の姿石に成しと。
いひ伝へしもよそならず。妹佐用姫もそれに替らぬ思ひ死。姿の石を見るたびに母様計りか自迄が歎キのたね。よなく光
る石の火を。しづむるは仏の力。妹の聖靈頓證菩提と。涙ながらに。回向あれば。お道理ぞやと並ある秘心なき。漁夫が

袂もしほときの。波打よする計なり。

折からに庭の。切戸ひらいて。立出るあらくれ男。はちまき取て小腰をかぐめ。私は此お屋形へお出入申す。石工の茂藤次とて京都の職人。たつた今迄。(二十七ウ)奥で後室様に酒強られ。じゆつなさにふつと立て。獵師共の願ひのだんく聞付けて。石の光り私が。止てやらふと存て。是へ出ましてござりますと。畏げもなしにいふ顔を。清瀧じろく打守り。武烈天王様河内の国。千塚といふ。岩城を築給ふ故諸国へめぐつて。大石共を都へ上す。差図の役人のそなたに鹿忽は有まいが。今の詞に違ひはないかと。石屋に根継の根をおせば。浦人共是は耳寄り。申御前様。あの茂藤治の顔付なら恰好なら。誰ぞに似たとはおぼしめさぬか。ヲ、扱はそち達も気が付たか。清瀧がつれあひにいきうつしと。聞より茂藤治。あの御家老の兵庫之介様にかい。サア似た共く。衣服改め大小をさ、せたら。女房(二十八オ)のわしでも取ちがへるコリア忝い。お前様のそうおつしやれば。どこもかもしやちこばつて。どふやら刀が指て見たいと。清瀧御前にめをつけて。はや移気な茂藤次が。顔をながめて。名主がひよかすか。コレ石屋殿。取わけ兵庫之介様に。よふ似た所が鼻の大きさ。定てぼらと伊勢鯉を見るやうに有ふの。夜の網にかんまへて奥様。取違へてあがりますなど。どつと笑へば。清瀧御前も顔打あかめ。夫の留守の自に推参なわざくれ。早ふ石屋をつれてたち。石の光をとめてもらへ。長居は無用。そこ立と操正しき一言に。赤目つ、たる獵師共。名主が鹿相をいひくろめ。サアく御前をたち奥と。石屋を伴ひ立帰る。表の方賑しく。御家老様のお帰りと。知せに(二十八ウ)嬉しく清瀧御前。コレ皆の衆。我夫に折入て尋たい事も有し、ば、後室様へは帰国の様子。しばしの間沙汰なしに頼むぞやと。秘共を奥へよけ。待間もあらず。当家の執権兵庫之介幸満。舟

場より衣服改め入来し。ナフ我夫お帰なされしか。長の在京のるす中。後室様にも御機嫌よく。お前もお達者でと半分いはせず。ヲ、此兵庫之介が。達者な命はひらひ物。船中にて佐用姫君を。狭手彦殿に奪れ。につくしとは思へ共。根をたんだゆれば我寵忽。姫君つれて狭手彦殿此国へ立寄。すぐさま唐へおもむかれし。別れを歎死に。佐用姫こそ石に成しと。都鄙遠近の風聞。其時のしだら。汝はしかと見とゞけ(二十九才)たで有ふな。イエ。狭手彦様のお出さへしらず。見やしやんせ。向ふに見ゆる妹姫の姿の石。始て見た時のわたしが。様子を見たは跡での事。ムウ後室の為に清瀧其方はま、子。本の娘のさよ姫。それにいひ号の狭手彦。隠ししのばされしは断。此義をとくと吟味せよとの勅命。なんぞよい詮義の手筋はなきかと。苦り切て尋れば。

清瀧御前は又思ひもよらぬ。母様に何を御詮義遊すへ。ハテしれた事さ。天王御心を掛られしさよ姫を。奪ひ取り狭手彦は違勅の科人。それを其ま、見逃された後室の御心底。尋問ふ共中くたやすくはの給ふまじ。まだ其上に心得ぬは。此兵庫之介に能似たる。石工の茂藤治といふ都の(二十九才)職人に。近しふなさる、と聞キしが、女房誠か。さればいな。わたしも其茂藤治が事合点がゆかず。ひそかにお前に相談せふと思ひ。もどらしやんした事。母様には隠して有ル。それは幸。今舟場迄。迎に來りし下部に。其石屋が風俗。身の廻り迄とつくと聞キ合せ。御主人後室の御心服を尋る。一ツの術をめぐらしたり。これお見やれとつ、立上り。上下。大小かなぐり捨帯を。とくく上着をぬげば。下には木綿の肌着一つ。椽先の手拭おつ取。きりく捻て横鉢巻。石屋めいたるなりふりに。

さつても似たり似合たり。石切茂藤治にいきうつし。顔形の似たを幸。其姿で後室さまの。心底を聞ふとは天晴御思案。た

つた今迄。茂藤治とあの小座敷でお酒もり。酔たふりして（三十才）それ。其切戸からいかしやんせ。コレかふくとさ、やけば。

ヲ、其手つがひ合点じや。女房。そちは茂藤次が。又来ましたと申上い。それ。兵庫之介のぬけがら。ほんになあおまへの衣服大小を。見付けられたらよい物か。襖の内へ入して置たぞへ。ハテ扱声が高い。はやふ奥へとすゝめやり。其身は石屋に成りすまし切戸の内へ入にける。物音やめば。椽の下の地敷の石垣。内よりぐつとかなてこ入してはね返し。なんなく。一ト間を堀崩し。ぬつと出るは石工茂藤治。あたりを見廻し。砂打払ひ。切戸の透間をさしのぞき。兵庫之介が。我に成たは心得ず。此隙に我は彼に成かはり。もじりをくはせて天王方へ。後室がかくす秘密を白状させん。下屋で聞ケば（三十ウ）身の廻りは。是なる襖の内にこそと。取出す所へ奥より人音。見付ケられしと衣服大小ひんだかへ。次の一間に忍び入ル。

それ共しらずさよ姫の母の後室。姉の清瀧姉共を誘て。霊供の膳部携出。ナフ清瀧。新羅の国の。法明国師の教によつて。あの浜手に立し。物見の亭に仏間をいとなみ。死たるさよ姫に此ごとく毎日自が供養すれど。けふの非時は姉のそなたに供さす。念比に回向をなしてと。有ければ。ア、もつたいたい。母上のお手づから煮焼なされし供物。さかさまな巾ひ受。さきだつ姫の心の悲しさ。思ひやられて痛しやと。涙ながらに。霊供の御膳手にとれば。ヲ、はし折かゞみの姉妹。しんでも心は通ずる（三十一才）道理。生てゐるさよ姫に逢と思ふてはやとくくと。清瀧御前を仏間の方へすゝめやり。コリヤ女子共。自は爰に。家老兵庫之介を待合す。そち達は茂藤治に九献をすゝめ。必爰へ出すまいぞ。はやふ行ケと。

せり立られて秘共。アイく。間の切戸。おし明入ければ。跡引しめて。外から鎖まへ折こそあれ次の。間より出来る。石工茂藤治面体骨柄。兵庫之介によく似たれば。小袖袴のゆきたけ迄。しつくりあへ共おもげに見ゆる大小は。さすが石屋としられたり。

後室かけ寄りナフ久しや兵庫之介と。見まがふ詞に不敵の茂藤治。是はく。後室様にも御堅固でまづ珍重。扱京都の首尾はと。いふを抑て小声に成。(三十一ウ)コレ兵庫。都の様子を問も語るも跡での事。あれ成ル切戸内の小座敷へ。石大工の茂藤次といふ者を呼よせ。秘共に酒しいさせて置つるが。そなたの帰りを待かねた。あの石工をだまし討に。殺してたもと聞クより。恟。イヤ申何故に。咎ない茂藤治を。シイ声が高い。自が気のせくま、に。子細をいはねば不審は尤。過し比京上りの船中にて。そなたが奪れし。娘佐用姫をつれて狭手彦此国へ来り。父大友の金村の行衛を尋。唐へ渡ルが孝行の道なれ共。武烈天王の御悪逆にて。天下の煩ひ大形ならず。越前の国あぢまの、流人と成ておはします。先帝の太子玉穂の宮に。義兵をす、め奉り。太平の代にひるがへさんと諸(三十二オ)国をめぐり。今軍勢催促の真最中。その狭手彦を入唐したる体にもてなし。佐用姫は別を悲み石に成しと。アレ。向ふの山にあのごとく。姫が姿の石を。かの石工に拵させ。自然石と見せん為。硫黄の花に。銅煙を以て薫蒸すれば。其光り海にうつろひ。佐用姫が夫をしたふ。一念の神火よなく出るど。世上の人の口のはにかゝる工も。娘を再び天王へ差上ケまい為。髻の望も叶てやりたし。身一には玉穂の宮への忠義。あざとき母が謀なれ共。末代迄の諺に成べきぞや。そなたが帰ル迄と。娘清瀧にもけふ迄はいはざりしが。靈供の膳をすへてたもと。佐用姫を隠し置し。仏間の亭へやつたれば大形今。兄弟が対面してゐるである。茂(三

十二ウ) 藤治を殺せば此一大事。外へもる、氣遣ひなしと。石屋を一閃に兵庫之介と思ひこむ。老の咄をとつくと聞き。ハア扱は佐用姫君は。御安穩で御座なさるか。ヲ、石にもならず死もせず。狭手彦の種を身に持てはや五月。コリヤめでたい。お家の礎かたまつた。其悦に石屋が首。おめにかけるはたつた今。先々奥へ御入りと申上れば。ヲ、たのもしし兵庫之介。只何事もそなたの働。よきに頼むと立上る。後室をやり過し。後よりまつ二つと。刀はぬけども手は定まらず。道筋もとよりはらりずんど切さぐれば。うんとにつけにそりかへり。又切付を。身をかはして茂藤治が。腕にしがらむ後室を。ふりはなしどふみ付ケ。是お婆。あり(三十三オ)さまのこんなたくみ。大かたにずいたによつて。いぬるふりして。下屋から忍び込。兵庫に成つてもじりをくはせたれば。狭手彦が唐へ渡らず。日本に隠れてむほんの企。佐用姫が生て居る事迄白状しやつたれば。もはや外に詮義はない。しやばふさげの老ばれ観念しやと。とめをさ、んとする所へ。佐用姫伴ひ走り清瀧。ヤア氣が違ふたか兵庫殿と。おと、ひかけ寄り身をおします。すがり付いてはけとばされ。既に危き折こそあれ。

地色ウ) 扉めりくく打破て。石や出立の兵庫之介。侍出立の石屋がぬき身をもぎ取捨。ゑりがみ掴んでひつかづき。岩石落しに打付られ。すかさず起る茂藤治が。そつ首ちうに打(三十三ウ)落す。顔は見まがふ相手どしげに。職人と侍の。手練の程は格別也。

地色ウ) 手負の母をいたはりだきおこし。歎きの内にも清瀧御前。さきよりの様子をしつて居ながら。自さへ見違へたれば。茂藤治をおまへと思ひ。後室様の恨給はん。コレ申兵庫之介殿が。あのごとく職人の姿にやつされしは。姫君の生死の程を

尋問んと。暫時地ハルが間も母さまに。心を置しもつたいなやと。妻が悔に兵庫も眼をすり赤め。悲しみと喜と。何れを詞にのぶべきぞ。さいつ比鳴尾の沖にて。狭手彦殿の御舟へ。小石を打し姉共が戯を。佐用姫君のかこつ恋。石に成たい。石に成ても殿御の舟へ行きたいと。其夜の御詞を思ひ合すれば、松浦山にて歎死石に成給ひしも。若もし(三十四才)誠であらふかとんばう心を苦めしに。御堅固なる体を見て。委細の様子は聞クに及ばず。望夫山の古言より。思しつかれし謀。さすがややさしき母君の。御心を疑ひし冥加なやと。先非を悔て詫ければ。

二人の娘の介抱にて。後室苦き息をつき。なんのわびに及ぶぞ。今のそなたの詞を聞ケば。兼而我推量に違はず。鳴尾の沖にて。兵庫の助がしらず顔。わざと姫を狭手彦に奪れし。情の程を感じ入ル。女はいかにさかしくてもどこやらあどなき所有り。茂藤治にたばかり。打明したる一大事。天王方へ漏聞ば。是迄心尽したる。母が知略は皆むだ事。石工が死なれば。松浦山の姿の石の事。智狭手彦の義(三十四ウ)兵の企。誰しる者はなけれ共。心にかゝるは姫が身の上。夫と一所にも有ル事か。世を忍ぶ身に五月の。帯する迄は此母が。万に心付ケたれ共。今よりは無便りなからふ。姉の清瀧夫婦の衆。力をそへてまんそくに。産をさせてたべ。誰がいはず共心得て夜寝にも足のばすな。手をのばして。高い所の物とるなよ。こわい事悲しい事は。懐任の身に毒とはいへど。今めの前に母が最期。かなしうなふてなんとせふ。あたる十月に玉の様な初孫の顔。見よふくと楽しかひもなく。さき立ツ此身を。不便と思ひ兵庫之介頼ます。姉清瀧はいふに及ぶ。妹の佐用姫をも。見捨てばしたもんなど。いふ声もはやたへく頼。すくなく見へければ。

ふう(三十五才)婦がいたはり姫はいと涙にくれ。母さまの御最期は皆わし故。不幸をゆるして下さんせと前後ふかくに。

なきわぶれば。

兵庫之介声をはげまし。佐用姫君の御事は。たとへ御頼なきとても身命を抛ち。守護致さねば叶はぬ訳有り。某が身の本は。狭手彦の御父。大友の金村公の家臣。英大夫美知雛が嫡子。同名太郎伊企雛と申者。十八年以前主人金村。学問の爲人唐の時。肥前の国に船が、りし。日和を待しつれ、人にさそはれ。所の色里に入込。酒色におほれて。御舟の出もしらず。それより流牢の身と成て十八年以來。主君の婦朝を待共。金村公は年久敷日本に帰り給はず。それ（三十五ウ）より此隣国をへちまひ。縁有て御当家へ身をよせ。是成清瀧と夫婦になしくだされし所に。古主狭手彦殿と佐用姫君。御縁辺のいひやくそく。すは某が大友家へ。婦參の侘の。時節到来と存る折から。天皇より姫を召れし故か、る御難義。たとへ母君はさきだち給ふ共。我々夫婦が命かぎり。姫君の御介抱仕る。御氣遣ひ候など。申せば佐用姫。涙にくれし顔ふり上。なんぼう姉うへのつれ合でも。狭手彦さまの祖父君。三輪の大臣。百枝様を手にかけてし英太郎。自が身の介抱頼んでは。狭手彦さまへ義理立すと。いきまきしての給へば。（二十六オ）ホ、其御とがめはよき糺明。申ひらきは。百枝公の御最期に。残されし一通と。懷中より取出せば。佐用姫受取おしひらき。涙と共にくり返し。イヤア母うへ姉うへ悦んで給はれ。武烈天皇様の邪をにくみ。三輪の大臣さまは御切腹なされ。御首を英太郎へ。下されしとある御書置。是さへあれば狭手彦さまへ。いひわけはたつた物を。頼まいでなんとせふ。さはしらずしてあいそづかし。姉様御夫婦かんにんしてくださんせと。わぶる詞に。手負の母は嬉しげに。ヲ、それを聞てもはや此世に。思ひ残す事はないと。心がゆるめば老の身の眠ることとき。もろき最期に（三十六ウ）人々わつと泣しづむ。涙々はりんじうの。手向の水とや成ぬらん。

かくてはあらじと英太郎つゝ立て。こりやく女房歎きはかへつて。さきだち給ふ母君へ不孝也不忠なり。妹と思ふな主君の姫君御供申せ。櫛田明神の社司はお家の御家門。暫く頼んで御身を忍ばせ奉れ。某は石屋が姿を此まゝに。河内の国。千塚の城普請にくは、つて。天皇方の要害をとつくと見すまし。玉穂の宮の御旗上ゲ。主君の出陣あらんず時。城内より裏切して。ぶん取高名手始は茂藤治が此首と。片手に挿んで是を証拠に(三十七才)我こそは。英太郎といはずんば。か程に似たる面体には。主君も父も見まがひたまはん。身にそなはつたる一つの術と手にもたげ。見すれば妻も佐用姫も。いづれをいづれと見もわかぬ。いきるとしせるふたおもて。見るにつけても我くが。さきだち給ふ母うへにも似し。おもかげのあれかしと。なげきははてし。なきからを。おさむる。のべの露涙。なごりはつきぬ。わかれぢや。のちのあふ瀬をまつらがたもろこし。ぶねのつまごひにひれふる。山といまの世にその名を。たかくあらはせり(三十七才)

第三

蕩々たる上帝は民の辟なり。疾威ときは其命辟多しとかや。今上武烈天皇鳥飼の後のすゝめによつて。越州あぢま野にさすらへます。玉穂の宮を迎取んと七宝を鏤し。龍頭鷓首のふなよそほひ。簫鼓の音棹の哥。供奉の官掌奇羅一天にか、やかし。難波の岸より日をこめて八重のしほ路を越の海。角鹿の浦に御舟つく。御座の高殿みとのくに簾かけわたり。瑪瑙の椅子に武烈天王寛くとして座し給へば。平群の大使主高鳥謹而。此度鳥飼の後の御すゝめ(三十八才)当国あぢま野の流人。玉穂の宮を召返されんと遙々の行幸。配所を落失年内行衛のしれざる宮なれ共。招よする我術。後の迎に御出と。高札にしるし諸方にたてさせ候と奏すれば。天皇巍巍たる御気色にて。宮

が在所しれざるは奇怪に思ふ計り。たゞ聞まほしきは十八年以前。唐へ渡りし大友の金村が正死の程。我を位にす、めし者なれば其恩を忘れず。宿称狭手彦に申付。父が行衛を尋よと入唐させつれ共。彼めは朕に恨もあれば唐土へ渡りしも分明ならず。日本に隠レかゞみ。玉穂の宮に志をはこばんも計がたし。兎角宮が有りかさへしれたれば此詮義も明白。高礼にて(三十八ウ)招キよせんとはエ、手ぬるしくと。きびしき宣旨にさしもの高鳥恐れ入て閉口すれば。並ある人くいか成風にやかはらんと。舟の上より雲の上。君が叡慮のてりふりの日和あんずる計なり。見渡せば。風にちりとぶ。海士小船。何の恐れも白浪にゆられ。くつて漕よする。

御舟の官人声くぐに。君の御舟しらざるか。見ればいやしき女をつれたる海蜻蛉。立さらずんは矢さきにかけて舟腹射ぬき。鑿にしてくれんとひしめくに。ちつ共さはがずかの女。わたしはもと此浦のかづきの蟹。今は他国に住居致せば行幸の舟共存ぜず。是成舟長頼んで此所へ参りしは。向ふに見ゆる手結の(三十九オ)沖といふ所に。九穴と申て奇代のあはび有ル事を自ならでしる者なし。取て得させよと有徳の人の頼故。昔に返る海士のわざ恐れながら君様にも。御慰に御覽遊ばせホ、くぐくと申ける。

帝遙に叡覧有。ホ、九穴の貝とは龍宮城の翫び。命を延る霊葉と伝聞ク。その貝とるを手結の沖にて遊覧せん。まづそれ迄は酒相手女来れと詔。是へくと招れて。恐れも波のしほ馴衣ひれなき身にもおちげなく。御舟に乗移れば。大使主声あららげ。君の御用は女め計り。見苦しい蛎殻舟をはや漕のけいと舟長は。目玉。もらふて口あんごり。

秋の日和の定なき一むらしきる雨の足。からの数は百足の。(三十九ウ)蜈蚣の波をはしるがごとく手結の。沖へと三重

へみゆきある。

爰地色中に応神帝おうしんてい五世の御孫大跡部おみみの王子うち。先帝の太子に立給ひし御身なれ共。玉穂の宮と貶号へんがうし。今は越路にさすらへのよるべ
 さだめぬ御身の上。主従ウ忍ぶ簀のみと笠かき。御供ウに随ひし野見の弥綱太有熊。御前ハルに手をつかへ。此度詞鳥飼とりかひの後より。宮御帰洛有
 べしと。所々に触ふれながし。是。爰にも此ごとく高札を立たたりしは。疑もなく天王方の謀はかりごとと。先だつて我母もお諫申せ
 しに。御用地ウひなきは禍わざはひを招せ給ふなされかたと。打涙スエテハルくみ申すにぞ。いやとよ弥綱太。鳥飼詞の後は慈悲心ふかき人と。都
 より戻りし時の汝うはまが噂うはま。今又疑ふ。いぶかしさよ。あれく手結たゆひの（四十オ）沖中に管弦くわんげんの聞るは後の舟。慥地中に見よと仰を
 受。高ウきは御めんと磯馴そなれの松によぢのほりあれくく。御覽候詞へ後の舟にてあらはこそ。女孺地中女官にょじゆは一人リもなし。噂うはま
 にちがはぬ帝の行幸。此所ウに長居せば。いか成災難さなえんふり来らんも計はかりがたしとひらりとおり。ヤアこなたを見給へ。磯部地ウ伝
 ひに二人づれ。さきなは慥恋君ウといふ間程なく。まだうら若ハルフシキ。とまの菅薦すがこまの蓑かさにして。俄時雨ウしぐれに御所ぬり笠詞。ヤア。大野の
 長者の息女。照日の前。お乳母じやないか。是地ハルはくと有熊が。驚く内に姫はかけより。有ウしにかはらぬお顔を見て落着おちづい
 た。そもじも無事で。おま地ハルへさまもおまめでと。互ハルにひといだけ付。つもる恋しさゆかしさに。涙フシは詞にさき立り。
 お乳地中（四十ウ）の人引ハルわけて。コレ弥綱太様も見てじやのにあんまりな。道々の雨あめに濡ぬれたらいで又ぬれ事かいの。イヤく
 お乳母こりや姫君のがお道理。親達に隠す恋。都から戻つてもつい逢あひにはこられず。はづみ切いでなんとせふ。何おつしや
 るあまやかした事ばつかり。都地中よりのことづかり物やら太切たいせつな言伝ことづてハルもあるげなど。風呂敷包ウおしひらき。何かはしら木の箱
 を御フシ前に差置はけは。

照日地色中の前も所体繕しつてい、つくろひ詞色を改め。サテ今度都にて。三輪の大臣百枝公のおめにはかゝりしか共。一方の大将にお頼たのなされた
いと。仰おほこされし狭手彦殿は折あしい入唐。ヲ、其義は有熊が噂うわさにて聞しが。心得ぬは丸人まるの伝言でんごん。誰人たれよりと尋給たずへ
ば。アノナ。三輪の大臣さまの御内意には。三種の神器じんぎの内宝剣うちたけは。(四十一才)帝の御心たけぐ敷故。片時も玉体ぎよくていを
はなし給はず。神璽しんしと八咫の鏡は先達て奪ひ取。石上いそのかみの潔友きよともといふ神職しんしよくに預うけ置たれば。宮さまの御世みよにならば差上さる手
筈つ。又此箱ここのはこに入置しは。諸国の官軍をあつむる錦の御旗。宮様へ差上さ上うケよと。わたしがやうな数ならぬ身に。かゝる大切な
御宝みたかを。三輪の大臣様のお渡しなさんしたも。君きみがお情なさけうけし故と思へば嬉うれしさ。はやふお顔が見たいやら。花はなの都も身
にそます。ほんに朝あから晩迄ばん宮様の事ことばかりを。思ひ暮くして居た物を。よふ戻もどつてくれた照日あかりと。おつしやつたら罰ばちがあ
たるのふ乳母ちちと。おほこに見ゆる小娘こむすめも。恋こひにはすねる習なづひかや。

(四十一才) 仰おほを待まちず弥網やみ太たひつとり。某都あつの龍田りゆうでんにて。逢あひし時は父の長者の手前てまへを思おもひ。かゝる様子を隠かくされしは女の発
明めい。我君われきみには錦の御旗受とりたまへと。紐ひもをとくく蓋取ふたひらけはこはそもいかに。内に御旗みぼしはあらふしぎやと。申ませば
宮も御驚おどき。照日あかりはわつと泣出なし。こはそもいかにこはいかに。御旗みぼしを箱はこに納いめしは京での事。封ふうを付つけて大切なわらはが
守りと嘘うそついて。父ちち上に預あけ置しが。詮義せんぎをすれば盗人ぬすびとは。イヤア。父の長者に極きよくつたか。サイナ。それじゃによつて。詮せん
義ぎもならず。

いひ訳には此通りと。綱太つなが一腰ぬき取とつて。既すでに自害じがいと見へけるをア、はやまるまい。盗人ぬすびとが父の長者ちやうじやうとされたれば。今いま
宵の内に有無あやうを決けつせん。宮みやを伴ともひ奉ほうり(四十二才)長者の屋形やがたへ忍しのびこむ。親おやに見かへて。君へ忠義ちゆうぎを立たてる心がないならば

勝手次第と。するどき武士の一言に。姫は涙にかきくれて。手引せいならするはいな。若父上の御旗を戻し給はぬ其時は。ひよつと。宮様に別る、品には成まいか。わしやそればかりが悲しいと。歎しづめば宮も不便とヤア有熊。余りつれなき計ひとの給ふ詞のさきおつて。イヤ照日の前の情にほだされ。長者をかほふ御心では。錦の旗の詮義いつ迄も事はひま。かく申すも君が為と。諫る折から。汀に繋ぐ小船一艘。有熊見るよりこはしれ者と。宮と姫とを後にかこふ其間に。蓑笠かなぐり舟底の。伏勢引つれ浜辺に上り。ヤア〜（四十二ウ）見付た弥綱太。某こそ玉穂の宮を配所より取逃せし。当国あぢま野の黒田の庄司が一子十郎氏時。夫故に我父は腹切ッて相果。八年このかた流勞の身。今度武烈天王此国へ行幸あり。宮のゆくゑ御詮義あれば。からめ取て先年の越度を申ひらく。其褒美には日比の恋人。それ成ル照日の前を此はなが。女房にもらふと髭くひそらして。匂ば。ヤアほてくろしい恋せんさく。照日の前と儕か中の媒は此綱太。手並はかうとひらりとぬいて切立る。玉ちる刃浪ちる磯を。追つまくつ、砂煙沙石を飛して三重へ追てゆく。野見の弥綱太取て返し。サア〜此隙に姫君は御帰り。必今宵の手引ぬかるまいぞ。アレ〜（四十三オ）敵が又爰へ。はやふ〜とせり立れば。

とかふ涙に照日の前。そんなら宮様おさらばと。跡は詞もなき別おち諸共に立帰る。

十郎氏時遙に声かけこりや〜〜弥綱太。浜手〜は高鳥公の数多の伏勢。玉穂の宮を引く、つて渡すにおいては。儕が命は申助んと。いふに弥綱太思案を極め。ヲ、敵の助言にもつくは此時。いたはしながらと宮の小腕取て押ふせ。手ばやくく、ればホ、天晴〜。いざ受とらんとよるを突のけ。イヤ。すぐさま天王の御舟へ引て弥綱太が手柄にする。それで

は此はなが骨折ぞん。手柄てうがなふては照日わの前まへが囉もらはれぬと。色いろにほうけた詞ことばにつけ込。貴殿きでんが恋こひの。(四十三ウ) 叶かふてだては有熊あゆが伝授でんじゆする。こりやかうかくとさ、やけば打ううな付つけ。なんじや。此松陰かきが宮みやと照日わが妹背いもせの中宿なかつゆ。出あふ相図あひづは。お身みが。松の木まつへ上あればかの。姫ひめがうせくつさるじや迄まで。ヲ、そふ共ともく。其蓑笠みのかさを着きて。此綱太つなに成なかはり。松まつの梢こずえへのほつてみせれば。五町ごや十町じゆ逃にげのびても。いつもの相図あひづと。てるひが爰こゝへくるはいの。ヤこりやたまらぬ。そんなら御辺ごへは其繩付いとづ。武烈ぶ天王てんわうの御前ごまへへつれ行手柄ゆきてにせい。身みが船ふねかそふ。結むすぶの神かみめ急いそげくと。手てもり黒田くろだが蓑みのかさ打うちて。そぐはぬぬれ事こと。

恋故こひゆのぼる松まつの木きの。下したにも蓑笠みのかさ有熊あゆが。獵師りやうし(四十四オ)の体ていに出立いて。跡あとでしつほり黒田くろだ殿でん。おそふて半時はんじそこらには姫ひめが戻かへる。必下かならずへおりまいぞ。ヲ、のみ込こんだ。恋こひはせつない物ものじやとおもや。まそつとうへか。そこらじやひくい。まだく高たかふと知略ちりやくののせて。舟迄ふねまでかるとはよい手番てづかいと。半丁はんぢやう計けいりも漕出こしだし。

いましめ解といて舟底ふねそこに。宮みやを忍しのばせ參まゐらすれば遙はるかへ向むかふに管弦くわんげんにぎ、めく龍りゆう頭とう鑄ちゆう首しゆ。イヤア是こそ天王てんわうの御舟ごふねに極ごくつたり。まつかいさまに欺あざむかんと。菅笠すがかたむけ舟ふねさしよせてなまり声こゑ。のふ申まを公所ごしょへ物申ものまをそ。あの磯いその松まつのちよんざきに。宮様みやさまとやら社やしろとやらの御家来ごけらい。弥綱太やなづなとやらいふわちよが。王様わうさまの舟ふねに恨うらみ(四十四ウ)いふと忍しのんでゐますと。聞きより高鳥たかとり大おほきに驚おどき。ヲ、獵師りやうしめ。天晴てんせいおのれはおこのやつ。天王てんわう此国ここのくにの国府こくふへ入給いりたまはゞ。褒美ほうびをくれふ尋たずてうせい。ア、有難ありがたしと弥綱太やなづなが。宮みやの御ご舟ふね押立おしだく。鯨鯢けいげいの鰓あぶらをのがれて帰かへりける。

天性てんせい剛氣かうきの武烈ぶ天王てんわう。もへたつ龍顔りやうがん火焰くわえんのごとく。エ、きつくはい成なる玉穂たまほの宮みや。一いったん配所はいしよを逐電ちくでんしたる大罪人おほなつみびと。家来けらい

を伏て。朕に恨をむくはんとは愚く。鳥飼の后が諫を用ひたる体に見せ。招よせて殺さんず謀をさとりしと覺たり。あれく獵師が訴人にたがはず。向ふの磯辺の松に忍びし簀笠。遠矢にかけんと玉座に有合ふ御調度がけ。蒔絵の弓に（四十五才）水晶の矢の根きらめく征矢打つがひ。つ、立給ふを以前の蠻人。矢面に立ふさがり。誰にもせよ合点もさせず射殺すとは。一天の君に似合ぬと。いはせも立ず平群の高鳥ヤア下主女め。邪魔。ひろぐかと引すゆれば。音に聞へし帝の弓勢。忘る、計引しほり。放ち給へば遠鳴して。黒田がふと腹羽ぶくらせて。はつしと忽まつさかさま。落れば石に頭びつしやりあへなき最期。梢に人を追のほせ。殺し給ふと今の世の。後記に残る悪逆は。此事也としられたり。天王怒の御声高く。ヤア女め。手結の沖に九穴の貝が有るとたばかり。此舟に乘たりしは。必定宮が家来めとしめし合せた術（四十五ウ）じやな。肉をしほつて血酒にする。観念ひろげと御剣をぬき持。儕ををつらぬく此一振は三種の神器の其一つ。是で死するは匹婦に過たるいみじき果ほう。蜚めを是へ引立来れと。宣旨あれば。高鳥制して。それは君の御そこつ。いかにもきやつ。宮方の荷擔人。手ひどき水火の責にあはせ。玉穗の宮が有かをほざかせ其うへにて。生爪を放して薯蕷をほらせ。樋に押こめて矛をためさせ候は。是に過たる御慰はよも有まじ。ヲ、一思ひに殺んより。責苦めんは抜群の楽と。宝剣を納給へば。はれ冥加に叶ふた女めと。突飛されて蜚の女。わるびれたる気色もなく。いか程に責（四十六才）給ふ共。宮の行衛は白波の。龍の都の使者。玉体近くたよりし望は是成ぞと。御剣おつ取船ばたより飛こむ女が首筋を。帝はすかさず驚掴。ひつさげられて持たる御剣を抜放し。帯切ほどけば骸はすつほり波間に入つて。御手に残るは脱の衣。

エ、につくき龍女のしはざやとうなり声。高鳥始め供奉の人々あれよくと汐に。或はうかれ或はおよぎ。耳ぬふ紅白浪や。御剣をうばひし女が有さま磯輪をさして三重へ越路がた。世渡ルわざの。からきをしのぎあぢま野に近年の出来ぶげん。時に大野の長者が屋形。秘蔵娘の照日の前都にまさる品形。身は只人の氏なふて玉穂の（四十六ウ）宮のお情うけ。親にもつ、む濃中は。まだひとりねの部屋住居めに見ぬ。秋を風にしり。庭の紅葉はや、散て。夕日に染る花園の今を盛の八千草の。花に見とる、姫ゆりの。姿の花やまさるらん。

秘共口ぐに申お姫様。けふは御父長者様。奥様をつれまして氏神もふで。其おるすをかんがへてお前には。どつちへお出なされしと。とはれて姫はもぢくとつ、む思ひの顔の色。お乳の人もどかしがりあの衆になんの御遠慮。此国の流人と成て御座なさる、玉穂の宮様へおめにかゝりにいたのじやはいの。今度都より姫君のことづかり給ひしは。禁中様の宝物。錦の御（四十七オ）旗といふ物じやげなが。けふ宮様へ渡すだんに箱の内に見へぬによつて。自害せふの死のふのと。いはしやつた時のわしが恟。爺御さまや母御さまのめ顔忍んで。是迄宮さまへの文の取次したも。すいた殿御にそはせましたいと思ふから。隠し〜て今では。乳母とあのお子の身の難義と。いふを制して照日の前。もう父上や母様のお下向に間は有まい。皆も心得其様な取沙汰したもんなやと。口をかたむる門前より。御帰りと告るに程なく次の間の。襖おしあけ大野の長者。夫婦打つれ立帰る。是は〜待かねしにはやいお帰りと。挨拶あれば母の波の戸。ヲ、嘸待遠かる。そもじや父の（四十七ウ）長者殿。無事で京より帰国有し悦びに。氏神の御社にてうけて戻りし万度のお祓。供につれし駒平に持せしが。なぜ持て出ぬ事ぞ。駒平〜と呼声に。はつといらへて中戸の口より入来るは。大友の宿祢狭手彦。玉穂の宮の

御在所を尋んと暫く爰に埋れ木や花かいらぎの腰に。り、敷着こなす紺のだいなしら台に。万度のお祓取のせて主人の。前に差置は。

長者立てお祓いの。箱を手つからかしこの柱に掲置。ヤイ駒平。今日は外の家来は召つれず。儕一人供させしはよくくういやつと思ふ故と。ことない機嫌に狭手彦頭を白洲にすり付。今(四十八才)参りのやつこめに有難いお詞。今日は奥波の戸様は。お里へ程近いとて御社より御一人お帰り。其間大勢の禰宜衆もろ共。筥飯明神の庭前にて万度祓のお勤。御退屈にごはりませふと。おもねる詞に。イヤあれ式の事に。退屈する下根で他国より来つて大野の長者と。人にしらる、やうに出世がならふか。兎角人間には。上根といふ物がなくては立身はせられぬ。兎はいふ物の女格別つかれも出ん。奥は立て休息しやれと。夫のゆるしに波の戸御前。姫もこちへと打つれて帳台。ふかく。入日影。てり葉散しく前裁の。薄。尾花の爰かしこ。波の(四十八ウ)うねくゆらめくごとく。風もふかぬにアレ。あれを見よ駒平。こま下駄なをせとい、立て。底に。折しも花壇に有りあふ鋤と。手鋤を主従おつ取叢を。さがせばさつと笹原より。のたくり出たる三尺計りの毒蝮。二人をめがけ紅の尖る舌ささ。ふり立る。

鋤と鋤とで追まはされ。の、字に成りつしの字に成つ。ぬけつ。くゞつ、蝮の。きう所は尾さきと狭手彦が。鋤にて切レ共気は。半身にとゞまつて。長者にかゝるを飛ちがへ。ふつと切たる鎌首の。其行方はなかりけり。そこよ爰よと。尋さがしてコリヤ駒平。都て蝮蛇の類を殺すには。頭を藝ざれば禍をなすといひつたふ。(四十九才)いかゞはせんといふ顔を。じろく守つてハ、くく。お旦那の仰共覚ぬあんまりな御用心。いかやうな禍をなせばとて。高のしれた虫けら

の首。其儘に打やつておかれませい。イヤそれは汝がかき破。大敵とてもあながちに。恐るべからず。又小敵とても侮
ず瑣細な事にも油断せざるが武士の心がけ。探出して取捨よと事をわけたる主命に。葦かきわけて狭手彦が。油断を見す
かしぬき打に。てうど切たる長者が刀鋤追取てはつしと受れば。ひらりと引つゝ、かくる。刃の鋒四寸八寸身のひらき。
又打かゝるを鋤のしゆもくでしつかととめ。へエ、くく。是はお旦那。拙者めを。なんとなさる。ホ、(四十九ウ)合
点がゆくまい。最前の毒蝮の切首。高が虫けら打やつておけとゆつた。詞に似合ぬ。ハ、くくはれきついあはてた頼付。
聊爾はせずそこを引ケさ。アイや先。お旦那からお引なされい。サアひけと。ぬき身を鞘におさむれば。

狭手彦も鋤取なをして両手をつかへ。たつた今御意なされしごとく。瑣細な事にも油断せぬ下郎めが心がけ。かくの通りで
ごはります。ハレよくしたりな。今のごとく。真剣で向へばうけ身のあしらひ。一ト通は成べきが。まつかうすればと妻手
指の小刀ぬいて手裏剣に。打ッもはやわざ鋤の柄の。細を楯に受たる規合。一ゆりゆつてかつきと(五十才)